

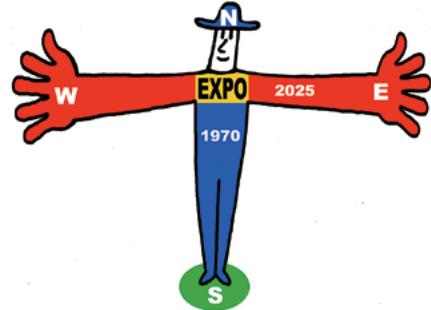


難波 正人

NAMBA Masato

竹中工務店
副会長

大阪・関西万博を機に、 西日本広域での発展を



新型コロナウイルス感染症や地政学的な情勢の悪化など、さまざまなリスクにより夢を語りづらい時代ではありますが、副委員長を務めている都市・観光・文化委員会に関連した分野で私が大きな期待を持っているトピックは、やはり2025年大阪・関西万博ですね。

1970年に大阪で日本万国博覧会が開かれた当時、大学で建築を学んでいた私は、十数回、会場に足を運びました。パビリオンの独特な建築から何かを吸収できれば、との思いもあってのことでしたが、ムービングウォークや日本初の携帯電話機といった未来を予感させるものに触れ、心を躍らせたことを鮮明に覚えています。

この万博の会場が大阪の北部にある千里丘陵だったことから、新御堂筋をはじめとした整備が進み、キタ、ミナミへとつながる大阪の「南北軸」が成長しました。大阪・関西万博では、「東西軸」の成長を考えるべきではないでしょうか。東は、けいはんな学研都市に始まり奈良・生駒や京橋の大阪ビジネスパーク(ObP)、そして西は夢洲まで。京橋駅の東側は大規模な再開発計画が構想されているエリアですし、夢洲は、まさに大阪・関西万博の舞台ですから、今後ここを拠点とした大阪ベイエリアの活性化が見込まれます。夢洲の向かいにある淡路島でも独自の地域活性化事業が展開されているので、淡路島までを含めた大阪湾一帯のベイエリアが、西の拠点として発展する可能性を秘めています。

そして、その勢いをさらに西へと広げ、瀬戸内エリアの活性化までつなげていければと考えています。すでに瀬戸内ブランドの確立と向上をめざす「せとうちDMO」が組織されていますし、宿泊型クルーズ船「guntū(ガンツウ)」や観光型高速クルーザー「SEA SPICA(シー・スピカ)」の運航も始まっています。小さな島々が連なる「多島美」に加え、

歴史が深く高い文化を持つ瀬戸内の島々を巡る観光は、コロナ収束後の復活が期待される関西エリアの観光にとってもオーバーツーリズム対策になると思われます。

しかし現状では、瀬戸内海の船の運航にはさまざま規制があるなどの課題もあり、瀬戸内エリアのさらなる活性化には、規制緩和への働きかけも重要となるでしょう。関経連でも、西日本経済協議会の広域観光分科会などを通じて西日本の広域周遊に向けた課題の洗い出しや環境整備に取り組んでいます。

実は、万博が開催される2025年は、3年に1度開催される瀬戸内国際芸術祭の開催年でもあります。2025年を契機に、瀬戸内エリアと大阪のベイエリアが緊密に連携できるようになれば、先述の「東西軸」は大阪・関西からさらに西へ伸び、西日本の観光資源の掘り起こしにもつながるのではないかと考えています。

まちづくりには時間がかかります。私が社会人になったころ、うめきたにはまだ梅田貨物駅があり、中之島の西のエリアやOBPには何もありませんでした。こうした場所で一からまちをつくれたら楽しいだろうな、との思いで50年近く都市開発に取り組み、大阪や関西の発展に貢献できるまちづくりを考え続けてきました。神戸生まれで、大学は京都だった私にとって長らく大阪で仕事ができたことは幸せでした。神戸が大好きなので、本当は「仕事も神戸で」と思っていたのですが、そこは「住めば都」ならぬ「働けば都」。今は、うめきたの完成を間近にして、感慨深いものがあります。

大阪・関西万博を契機とする、東西を軸としたまちづくりの進展、そして、さらに西の瀬戸内までを含めたエリアの発展に期待しています。

(談)